

メルヴィル「白鯨」

刑部憲暁

メルヴィル「白鯨」 千石英世訳 1

「白鯨」上巻 その1

p19「先生は古い文法書の埃を払うことをことのほか愛好していたが、そうすることで、死すべきおのれの運命にしずかに思いを馳せていたのだろう。」

p24「地上では、砕かれた心を寄せあって慰め合うばかりのおれたちだが、天上に駆け上って砕けることなき祝杯を上げようではないか。」

言葉の前で、人の生はあまりにもはかない。小説文学とはまさにその陽炎のような生へと向かって行く旅のようなものである。そこには、たちどころにやってくる死の混沌ばかりがあるのだが。

p25「この物の怪の口の混沌に入り来るものは」

一方でこの「混沌」の入り口は、言語世界＝私たちの世界、からの滅びへの出口でもあるだろう。

p47「勇気を出せ、若き人よ、そなたの心臓が止まるなどありえない／豪胆なる鋸打ちはいま鯨に鋸を放っているではないか！」

生は、この奇妙な死の出口に向かって行く闘争だ。なぜ向かって行くのか誰ひとり考えてみるものはないし、それどころかその先にあるものについて、敢えて考えてみようとするものはない。考えてみることを思いつかないからではない。もっと積極的にその先が死であることを信じないのである。なぜ信じないのか？ もちろんそれ以外に道がないからである。「勇気」を奮って突き進む先に人は生の絶頂をしか見ないからだ。そしてそれは幻想ではない。であるはずがない。それは幻想を超えていると思える。そこにこそ「わたくし」の生の幸福が隠れ潜むように思われる。そのような狂信が生へと向かう私たちの勇気の源泉なのである。

そんな風に考えてみると、「白鯨」は、ハイデガーの思想の対極にあるという印象が生まれる。ハイデガーは人間は根底において死の不安に晒されている、とした。しかし、人間の生は、むしろそこから遠ざかったところを目指すのではないだろうか。死は突然に訪れ、そこから逃がれ去ることは出来ないのだが、だからそれは人間の根底に不動の位地を占めるのかと言えば、必ずしもそうではないのではあるまいか？

「白鯨」上巻 その2

「海」とはなんであろうか？

p57「我が財布の中身は底について、加えて我が心をひきつけるものはもうこの地上には何もないということになった。海に行こう、そうだ、少しばかり船に乗って世界の海を見に行こう、...心の奥の憂鬱を払い、血のめぐりをととのえるためにおれがいつも使^てう術だ。」

「さらには、憂鬱が嵩じる余り、ついに自己抑制の心の努力もむなしくなって、人の頭に乗っている帽子はすべて巧みに叩き落とされねばならぬとの思いに深くとらわれ、そっと街へさまよい出てはその狙いを定めるとき、そんなとき、そんなときこそは、すみやかに海に行かねばならない。それがおれにとっての拳銃と実弾のかわりなのだ。」

他者との関係性が揺らぐとき、「イシュメール」の前には海へと通じる道が開ける。そしてそれは彼だけに限った話ではない。

p58「何が見えてくる？ それは数千の人、いや数千、数万の人がじっと海を見つめて物思いにふけている姿だ。」

誰にとってもp60「瞑想と水は永遠に結婚している」というわけだ。「海」はだから、他者から切り離された一人の人の、閉ざされた内面世界の広がりである。そこでは如何なる限定も存在せず、「永遠」があると感じられている。

p62「泉のなかに苦しいほどにも美しい幻^{まぼろし}が見えてくるのを知って、ナルシスはそれに手を伸ばし、さわろうとした。そして身を乗り出した。そして、溺れた。だが、同じ幻を、すべての川、すべての海に見るのがこの我々、我々自身にほかならぬのではない。触れがたき生の幻の幻、生をめぐ^る一切の謎を解く鍵がそこにある。」

「海」は、「触れがたき生の幻の幻、生をめぐ^る一切の謎を解く鍵」がそこにあると感じられる場所だ。この他者から切り離された一人の人間の、内面に閉ざされた広大な広がりである「海」は、生の幻想性の、可能性そのものだ。この価値の歪みを支えるものがp67「巨鯨の幻」である。

p67「何かを予兆し、神秘をたたえていたのだ。物の怪めいたそれが好奇心をとらえてはなさなかった。加えていうなら、その小島のごとき巨体を悠々^け回転させて巨鯨が遊^{ゆうよく}弋するはるか人跡未踏の遠い海、はたまた、巨鯨の有する脅威、すなわち言語につくしがたきゆえに、名づけようにも名づけえぬ危機の数々、あるいはまた、巨鯨の引き起こすパタゴニア的ともいべき驚異の大音響と大景観、これらすべてがおれの意欲をかきたて駆り立てるのに与って力があつた」

p68「はるか遠いものに触れようと切望するものにとっては、それは胸苦しいほどの心の疼きとなって身をさいなみつづけたのである。」

遠さだ。このイメージこそが「私たちの世界」、共有されている確実な世界からたち去るということの暗示である。それは同じく「私たち」の共有されている正しさを去るということの暗示でもある。

「白鯨」上巻 その3

そのようにして「白鯨」という作品は、生の幻に直接的に触れようとする試みだ。

p 65「ああ、人間とはいかに喜々として破滅へと落ちて行くものたちであることか！」

生の幻想性や脆弱さを否定することなく、その弱点を突き崩すことなく、幻のままに賛美する意図がここには感じられる。そしてそれこそが小説文学という営みの本質なのだと思うのである。

しかし語り手の「イシュメール」は、それを語るに相応しい人物である。彼はここまで書いたように生の幻想性に理解を示し、それを賛美する意識を持ちながら海をめざす人間であるが、同時に私たちの同類でもあるからだ。

p 63「だからおれが海に行くときは、そう、ただの水夫としてマストを背にして行くのである。つまりあれこれ人に命令される立場で行くのである。」

p 65「海に行くときはいつも水夫として海に行く。我が労苦にたいしてかならず金が払われるからだ。」「最後にもう一度いう、海に行くときはいつも水夫として海に行く。前甲板には健康に良い運動と清らかな空気がある。」

p 64「この世に奴隷ならざるものなどいないのだ」p 65「人はすべて多かれ少なかれ小衝きまわされるのだ」と「イシュメール」が言うように、「互いに小衝き小衝かれしつつ」他者の前に生きるに人間、他者の下で生きる人間、生活し、健康に気遣う人間として「イシュメール」はこの物語の中へと旅立つのであり、彼のこれらの言葉は、読者がこの本の扉を開く時、すぐ傍に寄り添う位置に彼が立っていることを証しているのである。

同時に「イシュメール」は反・ハイデガー的な人間として私たちに寄り添うのである。P 127「然り。イシュメールよ、お前も同じ運命をたどるであろう。だが、なぜかおれはここで陽気になる。旅立ちへの誘いは歓喜に溢れ、出世のチャンスは上々。そう、砕け散るボートのゆえに、おれは不滅たりうるのである。これこそ位階の特進だ。然り。捕鯨という仕事には死はつきものである。あっという言葉もないままに急に永遠にたどりついてしまうのだ。」

彼の靈魂に対する信仰そのものはどういうことではない。そうではなくて、生を考えるのに、死をスタートラインとしないという姿勢が彼の特質なのだ。これは頹落を意味するものではない。むしろ死と隔てられた生の本質に対する洞察があるのだ。

「白鯨」上巻 その4

つまりキリスト教的世界は死の圧倒的な脅迫の力を己の求心力に変えた所に成立する世界であるとすれば、これと対峙する世界観を感じさせるのだが、それを最もあからさまに体现する人物が「クイーケグ」であろう。

P181「世界はどこへ行こうと、相身互い、相互に株式を持ち合う世界のようなもの。我々人食い人種がこのキリスト教徒たちの力になってやらなくてはならぬ」

ナンタケットを目指す船の上で一人の失礼千万な若者の命を救った「クイーケグ」は、たった独りでキリスト教世界の全体に対峙する存在だ。ただしここに見る通り、この対峙は敵対関係を意味しない。この対峙の意味するところは、キリスト教世界の外の暗示なのである。

この異教徒「クイーケグ」を親友に選んだ「イシュメール」もまた、同様にキリスト教世界から一歩足を踏み出して行くだろう。この吾知らぬ前進は、他者との間で共有された世界からの、我知らぬ踏み外しを意味するだろう。更にこの前進は、これから始まる航海の本質的な意味を預言するものである。

この「モービィ・ディック」を求めての航海は、単なる物語上の設定に留まるものではない。作品そのものが、作品を包みこむ言語的日常性と切り結びつつ、そこから離脱して行く運動とも重なるものである。作品が冒頭に「鯨という語の語源」「鯨という語を含む名文抄」を持つ事には意味がある。そして更に作品内部においても、「説教」の章、「弁護」の章、「鯨学」の章などを経て、「モービィ・ディック」「白い鯨の白さについて」へと進む時、私たちは作品とともに私たちの日常性からこぼれ落ちて行く経験へと誘われて行くのである。

おそらく、日常性と切り結びつつ物語を始めるという条件が、小説作品に「遅延」という性質を付加しているのだ。私たちは早く「白鯨」に出会いたいと考える。けれども作品が、小説文学としての本質をとことん突き詰めているものであるならば、私たちはまさに、私たちが生きている足元の土台と鼻を突き合わせることを済ませなければ、一歩たりとも先へ進む事は叶わないだろう。そこから作品が始まるからだ。そこから生が始まるからだ。だからこそ、作品が力を持って私たちの人生を揺るがすのである。

p442「モービィ・ディックは偏在するだけではなく不死である(不死とは時間における偏在に他ならない)。」

p443「未だ前例をみない悪の知力」

p445「白鯨は眼前を泳ぎ行く悪の結晶体となった」

以上「モービィ・ディック」の章

「白鯨」上巻 その5

p 456「白色をめぐる思念の芯のところにはいかにしても捉えがたき何かがひそんでいる」

p 462「主としてその霊的白色にあるということ。かくしてこの神性はこれを目撃した人の崇拜の対象となる。しかし同時に意味不明の恐怖を押しつけてくるものともなるのだ。」

p 471「白とは、つまるところ色の一つではなく、色の欠如が目に見えているありようではないのか。と同時にあらゆる色が集まり凝結したありようではないのか。だから、白一色の大雪原は意味に溢れ、しかし同時に、ものいわぬ一枚のただの空白なのである。」

p 472「これらすべてを象徴するものがあの白子鯨にほかならない。さて、ことここに及んでなお、あなたはこの火の点いたような我らの追撃を異とされるであろうか。」

以上「白い鯨の白さについて」

この2章によって、私たちはようやく「イシュメール」とともに「エイハブ」のお供として乗船を許される。いよいよ私たちの航海が始まるのである。その時、私たちの思念には、もはや「モービィ・ディック」は単なる巨鯨ではなくなっている。語源が語っていた姿形から遠く離れ、名文抄が描いていた大雑把で大仰な恐怖よりも更に不可思議な力、マッブル神父が説教段の上から語り聞かせた、キリスト教的な神の使いである巨鯨よりも、一層神秘的な力を持つものとして、「モービィ・ディック」は思い描かれている。今や私たちの視線は「イシュメール」とともに「エイハブ」の視線に寄り添っているのだ。

この時見えているのは、「意味に溢れ」た白、「ただの空白」である白だ。おそらくそれは、言語の歴史、文献の歴史から切り離され、キリスト教的世界から逸脱し、私たちによって共有された空間から切り離された人が見た風景である。それが何であったかは、下巻を読み進むうちに明らかとなるだろう。

p 506「白鯨の追跡には想像力の瀆神的ともいべき異様な興奮が伴う。それは当然のこととして、しかしさしあたっていまは何かの方法でこれを除去しておく必要がある。つまり、この航海の怖ろしい本質は見えないところにひっ込めておく必要がある(なぜなら、行動に紛らせることなしに瞑想を持続させるような豪胆を持ちあわせる人はきわめてすくない)、...」「...かれらをはるかかなたの空白の対象に繋ぎ止めておくには、それが究極においていかに生命と情熱を約束するものであっても、さし当たってはその場その場で仕事をあたえ、そのときどきに興味を持たせ、最後の突撃に向けて威勢と意欲を殺がぬようにもって行くのが一番の大事なのである。」

「白鯨」上巻 その6

小説作品は遅延性をその本質として持たねばならない。もちろん本文のこの部分で書かれている事柄は、「ピークオッド号」の乗組員の為にする配慮であって、直接的には小説の本質論ではない。そして実際作品はこの後、乗組員たちの日常生活について、日誌のような報告をし始めるわけではない。しかし、事実として遅延はすでに開始している。

P550「澄みわたった月明かりのなかに、あるいは、ときに星明かりのなかに、神秘的な潮が噴き上がる。しかしかき消えて、二度と見えなくなる。一日が経過し、二日が経過し、ときに三日が過ぎる。するとまた噴き上がる。この明確な繰り返しのたびに、船と潮噴きとを隔てる距離はなぜか一度目よりは二度目、二度目よりは三度目と遠ざかって行くように見えるのだ。しかしいつも行く手正面の彼方に現れる。いったいこの一筋に潮噴きは、我々を前へ前へと終わりなく、また限りなく誘いつづけるものなのであるか。」

この永遠に繰り返され引き延ばされて行く誘惑は、どんな内実を生み出したのだろうか。

作品をよくよく観察してみると、様々なレベルで捕鯨という営みの日常性に埋没して行こうとする意図がくみ取れる。叩きマットを織る様子、抹香鯨の追跡の様子、死を越える日常性のこと、他の船との遭遇の様子、鯨についての知識の整理。鯨の餌のこと、もりづな 銚索のこと。こんな調子だ。だから、「さし当たってはその場その場で仕事をあたえ、そのときどきに興味を持たせ、最後の突撃に向けて威勢と意欲を殺がぬようにもって行くのが一番の大事」だ、と言っていたのは、確かに乗組員に対する配慮ではあるのだが、読者もまたこの配慮の対象になっているかのようである。読者も語り手も、ともに「ピークオッド号」の乗員だからだろうか。

するとこの配慮の本質とは、いったい何かということになる。

つまりそれは誘惑の為には場が必要だ、ということなのだ。「モービー・ディック」にあっては、あの「神秘的な潮が噴き上がる」様子を見つめる為の場所、すなわち「船」である。「前へ前へと終わりなく、また限りなく誘われ続ける「船」が必要だということなのだ。それ無しには、どんな航海もない。どのような遭遇も存在しない。当然のことだが、私たちの生は、日常性の上でこそ、彼方からの誘惑に晒されるのである。小説は、この生の真実の姿へと向かう。小説の本質とは生への接近にあるのだ。だからこそ遅延は小説の本質を為すのである。

「白鯨」上巻 その7

P540「おれは死を越えて生き延びたのだ。自分の死と葬式はもう引き出しにしまいこんで固く鍵をした。…よし、とおれは思う。無意識のうちに腕まくりなどもしている。さあ行くぞ、いまから死と破壊の奥底へもぐって行くのだ。さあ、冷静に沈着に飛び込んで行け。随いてこれないものは置いて行く。」

P557『しかしエイハブはいま舵を取る水夫の方に向き直り、追い風に乗るよう、いつもの獅子吼のごとき声を上げて命じたのだ。「舵柄を上手へ！ 世界へ！」』

P558「いや、いつも人間の魂の直前を遊弋するあの魔の色を帯びた幻を狂おしくも追跡しつつければ、しかもそれをこの球形の天体の上に追いつづければ、我々はいずれ荒廃の迷宮に迷い込み、そしてやがて志半ばにして波荒き海に難破するほかはない。」

しかし一方で、この死との隣接やその凌駕のイメージが、日常的に交錯する様は一体どういうことなのだろうか。これらは決して本来日常的な風景とは言えないように見える。

「死」にはこの場合、連続する二つの意味を読み取ることが出来る。

一つは、誘惑するものの没落としての死だ。この場合「モービィ・ディック」の死を意味する。「エイハブ」ら一行は、まさにこの死を目的として「ピークオッド号」による航海を行っている。この目的の周りでは、「エイハブ」の狂気が私たちの生の個別性や尊厳を収奪し、彼の「狂気の世界」に参与するだけの付属物と化す強力な磁場が形成されている。この目的は、作品の中核、あるいは終局に位置していて、作品内部における私たちの生の唯一の意味でさえある。

だからこの死は、振り返って私たちの現実的な生の意味の淵源をも指し示しているように見える。すべての意味は、すでに沈黙し、失われたはずの「わたくしの世界」の方角から、その隠された内奥からやってくるのだ、という一事を語りつづけているのだ。それについて物語るこそが小説文学の本質的な意味でもあるのだが。

「死」の意味として、次いでここに立ち現れるのが日常性の崩壊、あるいはその懼れを意味する死である。「わたくしの世界」が沈黙することで「私たちの世界」はその秩序を維持し、私たちの間での世界と意味の共有を可能にする。そこへ再び「わたくしの世界」の声が響き渡るということは、「私たちの世界」そのものの存立が脅かされること以外のものではない。私たちは、そのような危険をくぐり抜けることなく、「モービィ・ディック」の死に立ち会うことは出来ない。他者との共有を断念し、絶対的な孤独を受け入れる覚悟なしには、この航海は本来成立しないのだ。

「白鯨」下巻 その1

捕鯨船の日常が丹念に描かれる。

p334「ここまでの章で語ってきたことは、まず、^{レヴァイサン} 檣頭に登って巨鯨を遠くから発見すること、ついで、海の荒野にそれを追い、深い波の谷間に追い詰めてこれを殺戮し、さらに、本船の船腹に引いてきて、断頭すること。つづけて、彼の脂肉製の外套が(昔の首斬り役人は、処刑した当の死刑囚の着ていた服を与えられるという原則に^{のつと} 則って)かれを処刑したものの財産に帰するというこみと。あるいはさらに、しかるべき時期にかれをして釜茹での刑に処し、シャデラクやメシャクやアベデネゴのごとく、鯨脳油、脂肉、および骨をして、つづがなく火をくぐらしむること、以上であった。」

これらの船員たちの日常が必要であるのは、私たちが作品の上で迫って行こうとする瞬間が、まさにこれらの日常性と深く関わっており、ほとんどその内奥に発見されるという直感があるからである。

銚索について語りながら、語り手は次のように言う。

p39「実際に矢のように走り出すまでは、漕ぎ手の周囲に蛇のようにしなだれかかっているのだ。だが、これが真の恐怖を運ぶ姿、他のどんな姿でいる時よりもこれがもっとも危険なのだ。だが、もうこれ以上はいまい。人は皆、銚索に^{なわづな} がんじがらめになって生きているのではないのか。人は皆、絞首刑の縄索を首に巻きつけて生まれてくるのではないのか。なのに、それがものいわぬせい、あるいはそれがかすかに見え隠れる形でいつもそこにあるからか、人は生の危機に気づかない。」

エイハブを死に至らしめたのは、まさにこの様な形の絞首刑であった。

つまりこういうことだ。日常性は、その内奥に、日常性そのものの終焉を隠し持っているものであり、この日常性の崩壊こそが小説作品の中で、真に待望されているものの真の姿だ、ということだ。

そして「白鯨」にあっては、この日常性の崩壊は、「死のイメージ」として結実している。様々な形の「死」が描かれる。

「タシュテゴ」の、死ぬことはなかったが、限りなく近接した甘美な「死」。

p168「もしあのとき、タシュテゴが、頭のなかで死に至っていたとしたら、それはそれで豪快なる最期を遂げたといわれたのではなからうか。かぐわしく優美な純白の鯨脳油に漬かり、鯨の至聖聖所ともいべき秘密の内室を^{ひつぎ} 棺とし、また埋葬の場として、手厚く葬られたことになるのだ。これほどの甘美な死はまたとない。」

「白鯨」下巻 その2

「ビップ」の精神の「死」。

p 311「海は、かれの肉体の有限を嘲笑するかのようには救い出し、しかし、魂の無限は水底深くへと溺死させたのだ。いや、溺死させ尽くしたのではなかった。生きたまま水底の神秘世界の奥深くへと引きずり込んでいったのである。」

「イシュメール」が経験した「死」への接近。この死は、「ピークオッド」が「エイハブ」と共にまっしぐらに突き進んで行く、作品の運命の全体像とも重なっている。

P 328「ほんの一分前まで、おれは羅針儀の文字盤の数字を見てそれを頼りに舵柄を操っていたはずではないか。羅針儀ランプが数字を照らしていたはずではないか。だが何も見えない。ただ闇だけが、それときおり赤い影に染まる闇だけが目の前に広がっている。いま何処に方角へ向かっているのか、このときおれが一瞬思ったのはそれだった。だが、おれがいま乗っているこの疾走するものは、しかし、何処かへ向かっているのではなく、むしろ、あらゆる何処かから遠ざかっているのではないか。身体が混乱し、身体が固まる。死とはこの感覚をいうのか。痙攣に貫かれた手を震わせ、おれは舵柄握り直した。」

「クイーケグ」が経験する「死」への接近。

p 439「言葉にならぬ畏怖に貫かれて、この死に行く野蛮人のそばにおれは座っていた。そして、その面差しに不思議なものを見たのだ。あのゾロアスターが死の床にあるとき、その死を見守っていた人たちの見たものである。それが何であるかはいえない。人のうちにある真に驚くべきもの、人のうちにある真に畏るべきもの、それはいまだ言葉になったことはない。書物になったことはないのだ。そうして死が接近してきた。」

作品はついには「ピークオッド」全体を「死」へと追いやる。ただ一人生き残った「イシュメール」もまた、限りなく「死」へと接近した上で、「棺桶救命具」にしがみつきのながらろうじて救助されるのだ。この日常性を崩壊へと導く「死」への接近には、狂気のような意志の力が必要だ。それを体現しているのが「エイハブ」なのである。

P 433『「よいか、ものごとの所有者はな、そのものごとを動かすものが本当の所有者なのだ。」』

p 515「天を望む四分儀を甲板に叩きつけ、踏みにじった人だ。この危険な海を、誤りの多い測定器のでたらめの航行測定によって手探りの航行をして行こうという人だ。このタイフーンの真只中、避雷針などいらぬといって憚らぬ人だ。この狂気の人といいなりになって、乗組員全員が道連れにされて、破滅へと引きずられて行くのか？」

p 601『「エイハブは地上の何百万という人間どものなかにいても、ひとりで離れて立っているのだ。わたしに隣人などはない。いかなる神もいかなる人間も我が隣人にあらず！」』

「白鯨」下巻 その3

p 646『「いかに侘しい破船の船長にすらも許されるあの甘美なる矜持が、あの最後の矜持がこのおれには与えられぬというのか。孤独な生涯が迎える孤独の最後、それがこれか！ ならばいまこそ感ずる、悲苦において偉大なるもの、それがおれだったのだと。…すべてをただ破壊するだけで、征服することなきもの、鯨よ、おれは最後の最後まで貴様にこの手で掴みかかって行こうぞ。』

この「エイハブ」の意志を支えているのは、何か。

P 369「だが、にもかかわらず、追うのだ。そっとしておくのが最良だといわれてしまう、そのことが呪われているというに等しい。そして、呪われているそのことで、そのものが最も魅惑薄きものとなるとはかぎらぬ。白鯨は、すべてを引き付ける磁石なのだ！」

P 412「地上の幸福は、その最高のものですら、つねに、ある種、その場かぎりの軽薄さに染まって行くのに、重く心にのしかかる悲苦には、奥底に神秘的な意味合いが澱んで行く。悲苦はそれを受ける人によっては、天使的崇高さにつながることすらある。悲苦の系譜を克明にたどって行くことと、明哲な論理を追うこととは、誤りなく同一のものなのだ。死に至るものの崇高なる悲慘、これを系譜に追えば、究極にたどりつく先は、ついに起原不明の代々の神々の間だ。」

「モービィ・ディック」、すなわち「世界の崩壊」＝「死」が「エイハブ」を惹きつけてやまないのは、それが私たちが生きる世界全体の「死」であり「崩壊」であるからなのだ。「エイハブ」が生きているのは、己の世界の不随意さの賠償責任を、他者との間で共有されている世界に負担させて行こうとする「不幸の意識」ではない。彼は「モービィ・ディック」の死を願いながら、実は自分の「死」を望んでいるのであり、もっと正確には、自分が生きるこの世界全体の崩壊を望んでいるのである。

そう言えるのは「エイハブ」の持つ力が「ピークオッド」全体を支配することで、「私たちの世界」を完全に侵食し、「私たちの世界」全体を包含しているからである。その上で世界を崩壊させようとしているからである。

p 108「宗教的狂信の徒輩らの歴史を見ると、狂信するものが自分自身を騙して狂信に就くその度合いの深さは、実に驚くべきものがあるが、しかし多数の他人を欺き、これを魔の方向へと引きずっていく力の底無しともいうべき深さにも、また驚くべきものがあり、その度合いは前者の比ではない。」

p 503『「見るがよい。貴様らの最後の恐怖を吹き消してやる！」エイハブは一息で鋳に燃え立つ火を吹き消した。』

なぜそのような崩壊を願うのか。なぜならその崩壊の暁にこそ、己の生の真実が明るみになるという直感があるからだ。モービィ・ディックの誘惑も不幸への意志も、すべてエイハブの生が、己の生を生きようとする衝動によって生まれたものだからである。

「白鯨」下巻 その4

P499『いまこそおれはおまえを知った。汝、清らかな霊よ、おまえを正しく崇拝するとは、おまえに反逆することにほかならぬ、そう知ったのだ。愛をも尊敬をもおまえは受け入れず、憎悪に対してすら憎悪で応じず、ただ殺すのみ。かくて、すべてが殺戮される。いま、汝のまえに立っているのは、恐れを知らぬ道化ではない。おれはおまえの言葉なき遍在の力がおれのなかに滲みわたっているのを認めるのに 吝^{やぶさか}ではないけれども、しかし、その力が無条件に、また全面的におれを支配することに対しては最後まで抵抗する。我が激震のごとき生命の最後の一息が尽きるまで抵抗するであろう。個を越えて遍在するものでありながら個の仮面をかぶって揺らめき漂うものどものなかに、いま一個の孤独者が立っている。一個の点にすぎぬけれども、そしてどこから来たものかは分からぬけれども、そしてどこへ行くものかは分からぬけれども、この孤独者であるものが地上に生を営むかぎり、孤独者のなかには女王のごとき個が生を営み、王権を享受しているのだ。その孤独者がおれだ。だが、闘いは苦痛を呼び、憎しみは苦悩を呼ぶ。せめておまえが身を低くして、愛の姿でおれのもとを訪ねてくれたら、おれも跪いておまえに接吻しようものを。しかし、おまえが居丈高にも完璧なる天上の力としておれのもとを訪ねてくるなら、たとえ総動員態勢の艦隊を率いてやっ来てようとも、一切動じないものがここにはいる。ああ、清らかな霊よ、おれのからだもここも汝の火でできている。だから、おれは火に作られし真性の子として、汝にいま火を噴きかえす』

p622『だが、エイハブは考える人ではない。エイハブは感ずる人なのだ。感ずる、感ずる、感ずるだけだ。生身の人間はもう感ずるだけで、ひりひり痛みが走るのだ!』

これがエイハブの求めている生のイメージである。エイハブはモービィ・ディックの手により絞首刑にされることにより、逆説的にたった一人で生きる者となる。死を影としてさえ認めずに、己の生をのみ見つめ続ける孤独者となる。世界を己の痛みとして感取し続ける孤独者となる。これこそ、生がその姿を最もあからさまに晒したときに見えて来た光景なのだ。日常性の内奥に丹念に隠された、皮を剥がれた人間の生の真実の裸身なのである。